

翼

空港圏の明日へ (No. 2)

ヨーロッパ視察 ①

町長 佐藤 晴彦

成田を飛び出し13時間、一旦ロンドンヒースロー空港に着き、1時間半の手続きをして別の飛行機に乗り換え更に2時間半ドイツのミュンヘン空港に到着しました。日本を正午に出発して約17時間のとても長い道のりでした。

周辺自治体の市役所や町役場を訪問して国際空港との係わり合いや、各々の町づくりについての繋がりについて伺い、これからの成田国際空港周辺地域や各々の市町づくりに繋げる為に企画されたもので



▲ヨーロッパ視察団

あり、大変な成果を持って帰れたと確信しております。はじめの訪問先、フライジング市役所を訪れ大会議室においてタールハマー市長自らの説明を受けました。フライジング市の市街地は空港からおおよそ6km離れたところにあり、かなりの騒音被害を被っている地域で、晴れた日の影響は少ないが、天候が悪いと市街地の上空150mを航空機が飛ぶこともあるそうです。一方この10年間で6000人ほど人口が増え経済的な恩恵は受けているが、反面、住宅建設によって地価の上昇が著しく、自動車による交通渋滞も発生しており、空港

の為の道路建設も必要だが空港会社や州（日本で言えば県）からの支援は無いのだそうです。また、人口や騒音被害が多い割には空港関連企業からの法人税が少なく、空港周辺地域の税金をひとつにプールして、人口に応じて配分されればと考えているそうです。

一般的に世界各国の国際空港を管理している空港会社は、JALやANAのような航空会社（エアライナー）と空港施設利用料として着陸・離陸各々1回いくらかと契約を交わし、その収益や免税店の管理などで運営しておりますが、成田



▲フライジング市長の説明

空港の場合その収益の一部を周辺地域に騒音対策事業に要する経費として交付しているのが、成田空港の離発着回数の増は空港圏地域に財政的な潤いを与え地域の発展をもたらすものであります。

しかしながら、成田空港での離発着回数については、事前に関係自治体との協議が必要とされており、2010年3月の暫定平行滑走路の2500m化後は、22万回が同意されているものの、更なる増便にはかなりの努力が必要であると考慮しております。一方ミュンヘン空港は、夜間の離発着回数についてのルールを決めているが、計画時の騒音の範囲内であれば問題がないとされており、飛行ルートを幾つかに分散させ騒音被害が集中しないように工夫することなどにより、本来のミュンヘン空港のポテンシャルをほぼ充足させる43万回の利用を促しております。この違いの是正が私たちの今後の大きな課題であります。